
S o u t h s - サウズ -

荒月 陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Souths ・サウズ・

【Nコード】

N0636U

【作者名】

荒月 陸

【あらすじ】

争いの場所は、そう遠いところじゃない。

僕達が暮らしているこの地であっても、

争いはあった。

もしかしたら、僕達が知らないだけで、

僕達とは違う世界のこの土地で、

僕達よりもっともっともっと未来の世界で、

僕達は殺しあっているのかもしれないね。

僕達の世界では、僕達は殺しあってるよ。

誰かの夢

赤い空

何処までも真っ赤な空

忘れた頃に姿を見せる、青空

あれは、夕焼けじゃない

《火》の空の色

木造の建物が焼ける

植物が、動物が、人が、

焼け落ちる音

あれは、夢じゃなかった

肌で感じた爆音

あれは、夢じゃない

叫び声が リアルに

聞こえる

ああ

ああ

堕
ち
た。

日記帳 1

2XXX年7月20日

晴れ

今日僕の家があるマツヤマからイマバリのおじい様の家に来た。

おじい様が大事にしているお花がいっぱい咲いている庭園で遊んでいると、すっごく大きな音がした。耳がびりびりするくらい、とっても大きな音。

すぐにおじい様とおばあ様にあれはなんの音なのか、って聞いたらおじい様顔を恐くしてきつと軍事演習でもしているのだろう、って教えてくれた。

ここまで音が聞こえるなんて…父様は大丈夫かなあ、母様も恐がってないかなあ。

パタン。

小学生のころ毎日のようにつけていた日記帳を閉じた。幼い日の拙い文字は、今と違って歪んでいた。

あの日の俺は、何も知らなかった。

あの日：7月の20日は、俺の故郷：エヒメのマツヤマが焼かれた日。

今では、俺の知っている風景なんて何一つ無い。

無機質なビルばかりが並び、一般人は肩身の狭い思いをし、軍人がニヤニヤと笑いながら町を闊歩する。平等なんて、何一つ約束されていない。

最悪な街。昔はこうじゃなかった。

俺の父さんの作った街は、作りたかった街はこんな街じゃかったはずだ。

エヒメ地区はシコク連合の中で唯一中立を貫く地区だった。特に俺の故郷であるマツヤマはその色が濃かった。

他地区や他地方ブロックの亡命者が殺到するその場所は人で溢れかえり、今の時代には珍しく衣食住に困っていなかった。

それは俺の父でありエヒメ地区の地区長でもあった蒼井光空アオイ ミツソラの目指す姿によく似ていたと思う。

父は、永久の平和を求めていた。だからシコク連合の誘いを幾度と断り中立：即ち戦争の無い世界を作り続けていた。

シコク連合はそんな父が目の上のこぶだったんだろうな。だから、街ごと焼いた。運良く生き延びたマツヤマの住人は言う。本当は皆壊して、シコク連合の意のままの要塞を作りたかったんだろう：だって。理由は簡単。単純明快。

マツヤマの人間はみんな父・蒼井地区長の信者みたいなものだ。そして、恐らく：父さんは街が壊されることを知っていたのだろう。だって、俺はその日に限って普段行くことの無い：疎遠になっていた祖父の家に預けられていたのだから。祖父母の態度からも、そうだと確信を持てた。

何故、俺は生き延びさせられたのか？何故、俺だけが生きなければならぬのか？疑問はぐるぐると頭をめぐる。

俺は、何故生きているんだ？

廃街・マツヤマ

——廃街・マツヤマ

ニャア

ドラム缶の上の痩せた猫が鳴いた。暗がりでも光るあの瞳を目印に、俺はその場所へたどり着いた。猫の座るドラム缶を左にスライドすると真っ暗な穴がある。俺は迷う事無くそれへ飛び込んだ。重力に引かれてすぐに地面に着地する。上でまたニャアと猫の声がした。そして地上から送られる光が途絶えた。あいつは優秀な案内人だな…。

地下水道特有の響く音が歩くたびに鳴る。いくつもの角を曲がり、地下水道を歩く。暫くすると、ほのかな明かりが見え始めた。黄色い薄汚れた色だが、暗がりに慣れすぎた俺の目には刺激が少しばかり強かったようで、思わず目を細めた。目が慣れるとそこにスラム街が広がった。

「…誰かいるか？」

俺の声がソコに響いた。久しぶりに声を出したものだから少しかすれてはいるが、きちんと出せただろう。声は反響して俺を包み込んだ。

ガサリ

「…ミラ？」

音が鳴ったほうを見て名前を呟く。するとすぐにそこから日本人らしからぬ金髪の少女が飛び出してきた。

「お帰りなさい！！秋空様！」

「ふ…ただいま。皆は？いるか？」

秋空。それが俺の名前だ。フルネームは蒼井秋空になる。正真正銘、元エヒメ地区地区長・蒼井光空の息子だ。そして、この地下水道街は俺たち蒼井派の残党が作った地下街。小汚く、かび臭いが電気もネットも通っているし空調も完備されている。流石に地下で食べ物

は生産できないから地上にある農地で作っているがココはすでにもう1つのマツヤマと言っても良いだろうと思う。

そして、子供…ミラは異国の血が混ざった子で、マツヤマ焼失の時に亡くなった母の胎から取り上げられた奇跡の子だ。ミラはそんな境遇であるにも関わらず、明るく素直に育っている。これもこの街に住む大人のお蔭だろう。繋がれた俺の左手を嬉しそうに見つめるミラを見て、俺も思わず微笑んだ。

「ミラ！どこ行っただよ！」

「ああ！またミラの奴う、秋空さまを見つけるのまた一番だぞ！」

「もお、秋空様が帰ってきたら一緒に迎えしようねっていったのに！」

ミラを追いかけて、次々に子供たちが姿を現した。

「お帰りなさい！秋空さま！」

「おかえりなさい！」

沢山の子供達がニコニコと笑顔で迎え入れてくれる。この笑顔に、何度俺は救われただろう。いや、これからも救われることになるんだろうな。俺はこの子供達が好きだから。

「ただいま、皆。」

俺の返した挨拶を聞くと、また子供達は笑って俺の手を引っ張った。この子供達の笑顔を見ると、本当にあの惨劇が嘘のように思えた。

「どうでしたか、秋空様。時空様方のご様子は。」

集会場代わりの広場で声を掛けられた。そこには子供達とは明らかに違う柔らかい笑みをした女。この地下街をつくった初期のメンバーであるミラの姉、ルナだ。

「ああ。じい様は元気そうだった。ばあ様は…俺に士官学校に復学しろと煩い。じい様が諦めただけ気は楽だが…。」

「ふふふ。秋空様は学校でも上位成績だったのでしょうか？それが鼻が高かったのでしょうか。百合様は。」

「かもな。」

ルナにつられて俺の口角も上がった。

ルナは不思議な人だ。あまり笑わない俺も、ルナに微笑まれると自然と笑ってしまう。

「もう、秋空さま！ルー姉じゃなくてミラと遊んでよ！」

「あらあら、ごめんなさいね。ミラ。」

「ミラ、俺は一度報告をしてから行くよ。先に公園に行ってくれ。」

「うー…秋空さまがそういうなら…。」

ミラも、不思議な子だ。きっと、ミラはルナに似たんだな…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0636u/>

S o u t h s - サウズ -

2011年10月9日02時54分発行